



「重い障害があっても働ける」 ICTを使って 福祉の常識を覆す

社会福祉法人プロップ・ステーション理事長
竹中ナミさん



「私は口と心臓だけがギネス級で、機械については今も全然駄目なの」。そう言って豪快に笑う竹中ナミさんは、コンピューターがまだ家庭に普及していない約30年前から、障害のある人がパソコンなど情報通信技術（ICT）を活用して仕事をする環境づくりに尽力してきた人物です。自身が理事長を務める社会福祉法人プロップ・ステーションでは、障害者を“挑戦という使命を与えられた人”を意味する「チャレンジド」と呼ぶことを提唱し、「チャレンジドを納税者に」をスローガンに、彼らにICTを学ぶ場や就業の機会を提供してきました。

始まりは、重度の障害で寝たきりだった知人たちの「働いて納税者になりたい」という言葉でした。心身に重い障害のある娘の麻紀さんを育てる中で障害者福祉活動に携わっていた竹中さんにとって、それは驚きの発言だったといいます。「軽い障害でも仕事がない時代でしたから、重度のチャレンジドが稼ぐことは想定すらできていませんでした」。そして、その手段は何かと尋ねた答えが、コンピューターでした。

「一日中ベッドの上で介護を受けている脳性まひの人が、『このわずかに動く指先でコンピューターを扱う技術

を持てたら、会社に通うのが無理でも仕事の方がこっちに来るやろ』と言うのです。福祉の受け手だった人が、ICTを使ってお金を稼ぎ、納税して支える側にもなる。そんな世の中の考え方ががらっと変わるようなことを本当に起こせたらすごいなって思いましたよ」と振り返ります。

早速、誰とでもすぐに仲良くなれる持ち前の性格を発揮し、人と人をつないでいきます。生まれ育った神戸の各地で場所を借り、最前線で活躍する一流の技術者を講師に招いて、障害のある人を対象にしたパソコンセミナーを全国で初めて開始。平成3年に

在宅での就労に向け、県の支援により開催しているICT技術習得セミナーの様子



早期の能力開発を目指し、中高生向けのICTスキルアップ講習会も。生徒たちはグラフィックソフトに挑戦しました。